



山本の作品を見て感じることは、生命力に満ち溢れている点に他ならない。ここにある躍動感とは、若さとか無知は無関係である。燃え滾る炎が氷の中に閉じ込められている。我々は氷の外からその様子を見るのではなく、炎の中から溶け行く氷を感じ取るのだ。

山本に制作動機を聞いた。「テーマは日常にあるものであり、それはいきなりやってくる。自己の裡へ飛び込んでくるのだ。私は待たない。」油彩 10 点の抽象絵画は総て、このような心の襞から発生する。それは抽象というよりも、心を描いているのだから具象だということが出来る。

山本にとって油彩にこだわる理由とは、表現のし易さにあるという。アクリルはコントロールが利かない。油彩は思ったように描けないところがいい。そして発色が美しい。自己が神とならず、素材と格闘する点に山本の自由が存在する。何故なら油彩はキャンバス地と拮抗するからだ。



山本にとって重要なのは、色と形である。そのために山本は自らのドローイングをコラージュし、その上で本画を作成する。幾つもの工程を経た上で、自らを乗り越えようとする意思が浮き彫りとなる。他力本願とは本来、自己のみで悟らず他者と自然を取り入れる肯定的な意味を持つ。

山本は 1990 年に生まれ、2012 年、京都嵯峨芸術大学を卒業し、現在は武蔵野美術大学大学院に在学中である。展覧会の経験は未だ少ない。ということは、作品を描いて発表するということが、未だ日常と化していないことを示している。ならば、それが日常となれば済むだけのことである。

これからの山本に必要な事項は、理想を持たないことである。どうすれば作品が成立するかなど問題ではない。重要なのは、今以上に手を動かすことだ。大作を描く力は充分にある。発想も面白いし実践している。だからこそその果てに何があるのかを見極めず、遮二無二描き続けて欲しい。

